

業務用キャベツ豊作



倉敷青果荷受組合の倉庫にうずたかく積み上げられた業務用キャベツ



大玉のキャベツが並ぶエーアンドエスの畑。例年の1.5倍ほどの大きさに育っているという

とを検討する必要がある」と富本尚作専務。今年からは前年比500ト増の約1800トをサラダなどに加工し、使用するキャベツの県産比率を5割強まで高められそうだと、栽培面積は現在100畝を超えている。

岡東や関西のサラダ工場向けに年間約4千トを販売している全農おかやまは、岡山市南区藤田にある倉庫が既に埋まり、岡山市中央卸売市場(同市場)内に倉庫を借りてストックしている。

例年より2週間程度前倒して出荷が集中したたそうだとほくほく顔め、需要が追いつかないで話した。

岡山県が中四国多数の栽培規模を誇る業務用キャベツが豊作だ。記録的な暖冬で生育が例年より早いため。県内の加工業者や、業者向けに販売を手掛けるJA全農おかやまの倉庫では、農家から集荷した大量のキャベツが山となっている。(久万真毅)

倉庫満杯状態 廃棄懸念も

廃棄懸念も

西日本最大級のカット野菜工場を構える倉敷青果荷受組合(倉敷市西中新田)。本社に隣接する冷蔵倉庫(延べ1720平方メートル)は、3000〜4000個のキャベツがぎっしりと詰まった鉄製コンテナが天井近くまで積み上がる。もとも5月に備えて貯蔵量を増やす時期ではあるが、3月

月末までの収穫期をあと1カ月以上残してほぼ満杯の状態だ。「大玉で葉の巻きもしっかりしていて出来は良い。ただ、これ以上は農家側で保管してもらおうか、別に倉庫を借りる必要は、単身世帯や働く女性が増えたことに加え、人手不足で調理の手間を省きたい外食産業にも浸透している。農家の所得安定にもつながることから、全農おかやまなどは使用量の多いキャベツの産地化を進めており、

岡山県内 記録的暖冬で生育早く

2020年(令和2年)
2月20日
木曜日

地域とともに

発行所

山陽新聞社

岡山市北区柳町2-1-1

電子版山陽新聞デジタル

https://www.sanyonews.jp

山陽新聞